

Title	カーレン・ブリクセン : 詩人の使命 : Hereticaとの関係において
Author(s)	岡田, 令子
Citation	大阪外国語大学学報. 41 p.91-p.109
Issue Date	1978-02-20
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80702
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

カーレン・ブリクセン

— 詩人の使命 —

Heretica との関係において

岡 田 令 子

Karen Blixen and the Heretica

by Reiko Okada

A postwar periodical, HERETICA (1948-53), was a stimulating means for a new romantic and heretical tendency from the late 40's to the early 50's in Danish literature.

Karen Blixen (1885-1962) was then invited to contribute her works to this magazine and later she became a leading figure in the so-called Heretica Group, where young and ambitious members from all literary circles gathered for discussions.

Showing a characteristic phase of the magazine, a most representative works by Karen Blixen, "Converse at Night in Copenhagen" from the last number of the Heretica (No. 5., Heretica, 1953) is taken up in this paper. Her prominent idea on literary art, and the mission of a poet, and her understanding of gods and women as the silent earth are expressed in a merrily form of conversation between the poet and the king with Lisa, a prostitute, beside them in her chamber. The author's positive position of eternity as a writer seems to be overpowering. Perhaps it may be an answer to her question of her own life.

Among many active writers in Denmark today old members of the Heretica are found, often with Karen Blixen's influence in different degrees.

I

或る作品が作家の死後一層重要視される場合と、その作家の存命中にのみ評価される場合とがある。カーレン・ブリクセン (Karen Blixen, 1885—1962) は前者であるといえよう。このブリクセンの死後12年たった1974年に彼女について3冊の書物が書かれ、さらにその翌年の1975年は丁度彼女の誕生から90年目にあたっていたこともあって、王室劇場専属のオペラ歌手であるフランス・ラッソン (Frans Lasson) の提唱で、ブリクセン協会 (Karen Blixen Selskabet) なるもの

が発足することになった。その第一回の例会において、ブリクセンの短編の一つ、“夜のコペンハーゲンでの対話”(Samtale om Natten i København)がコペンハーゲンにあるコンサートホール、Odd Fellow Palæ で朗読された。それには、王室劇場の俳優の中でも、今日第一人者と目されているエーリック・モヨーク(Erik Mørk)があたった。当時の新聞の一つはこの作品について、“これはスケールの大きい、一風変わった物語で、魅力的で極めて楽しく謎めている”と批評している。⁽²⁾

この“夜のコペンハーゲンでの対話”は1950年に書き上げられ、53年になって文学雑誌“ヘレチカ”(Heretica 1948～53)の最終号に発表されたもので、その後1957年に、ブリクセンの作品集「最後の物語」(Sidste Fortællinger)が出版された折、その中にもおさめられたものである。

この雑誌“ヘレチカ”は、現代デンマーク文学史上重要な位置を占めているものであるが、これは詩人であり、自ら出版社をもっていたオーラ・ヴィーヴェル(Ole Wivel)や、その友人で後に美術館ルイシアナ(Louisiana)を設立したクヌ・イエンセン(Knud W. Jensen)などによって計画されたものである。そして、この二人は当時の秀れた若手の詩人トーキル・ビョーンヴィー(Thorkild Bjørnvig)に呼びかけ、ブリクセンをもその協力者として誘ったのである。⁽³⁾

ブリクセンは当初この雑誌に大いに期待をかけていたが、その後色々な批判や問題もおこり、編集の際に意見の対立があったり、また経営的にも変化をきたし、決して一貫した明確な主張をもった文学運動とは認められず、必ずしも彼女の満足するものではなかった。⁽⁴⁾それはともかく、1967年に発行されたブリクセンの伝記、「タイタニア」(Titania)の著者ミーゲル女史(Parmenia Migel)は上記の雑誌を中心として行われた“ヘレチカ・グループ”とも云うべき運動について大局的にその特徴を述べているが、その要旨は次のようなものである。

1. 当時の文学界を風靡していた社会主義—現実主義的風潮に抵抗する。
2. デンマークがドイツに占領されていた時(1940～45)に力を持っていた文学界や批評家との軛を断ち切る。
3. 英雄的でロマンチックなものを求め、ユートピアを探求する。
4. 理想的なことを表現することのできた外国の作家たちに高い評価を下す。
5. 各々の人間に峻厳な運命のあることを信ずる。
6. 不義とも思われるような愛や、同性愛などをも、ブリクセンのように勇気をもって描き、また、神や教会、更には長年に亘って尊ばれて来た習慣なども、彼女のようにユーモアと機智をもって、極めて自由に取扱う。
7. みにくい世の中であって、あくまで美を擁護する立場をとる。(Titania pp. 147～8)

くり返すようだが、これはあくまでも後日考えられた“ヘレチカ”の特徴を述べたものであって、実際にもっと詳細にみると、当時の事情は上記と完全に一致するものではなかった。

“夜のコペンハーゲンでの対話”が“ヘレチカ”の最終号に掲載されたことはすでに述べたが、その当時のブリクセンと“ヘレチカ”の関係はかなり悪化していたと思われる。⁽⁵⁾それまでに、彼女の作品はこの雑誌の創刊号にただ一編のせられただけであったという事実にも注目しなければならない。“ヘレチカ”が廃刊となることが決って、やっと、このブリクセンの“夜のコペンハーゲンでの対話”が二作目としてのせられたのである。この作品が選ばれた理由は多くあろうが、筆者には上記のような事情をも考え合わせてみれば、ややもすればアリスティックな傾向をもつ作品をも掲載していた“ヘレチカ”に対する批判であると共に、自分の文学の主張を明確に読み取ってもらうことのできる作品を世に出して、雑誌の最後を飾ろうとしたのではなかったかと思われるのである。そこで、カーレン・ブリクセン研究の一端として、⁽⁶⁾第II章では、“夜のコペンハーゲンでの対話”を取りあげ、登場人物、時代、場所をも含め、この作品を種々な方向から特徴づけ、“ブリクセンの文学”をさぐってみることにする。それが“ヘレチカ”の強調しようとした側面をも明らかにするであろう。更に、第III章では、ブリクセン理解を深めると同時に、40年代末から50年代の初めにかけてのデンマーク文学状況をみる際に無視できないこの雑誌の成立過程及び、その展開の跡をたどっておくことにする。(cf. 附録)

II

この章では“ヘレチカ”(異端者・異教徒の意)が、その特性を缺いているとなじったブリクセン自身の短編“夜のコペンハーゲンでの対話”を取りあげ、果してこの作品がどれほどこの雑誌の最終号を飾るにふさわしいものであったのかを考察し、重要と思われる二、三の点を指摘してみるが、最初にそのすじ書きを簡単に述べておく。

1. 11月の寒い夜、雨のあい間に月が顔を出す。大通りでは車の往来も少なくなってきたが、狭い裏通りではコペンハーゲンの夜の生活はその最高潮に達したとみえ、あちこちで騒ぎが起り、女の金切声がするかと思うと、窓ガラスの割れる音もきこえる。この夜の巷で一人の立派な身なりをした若者が道に迷い、勾配のきつい朽ちた階段をかけ上って行く。この若者は従者たちとはぐれて、一人になった不安におびえたまま、ドアの下からもれる光を目にして、その部屋に入ってゆく。そこは娼婦の部屋で、すでに客が一人来ていた。女はネグリジェをまとっただけで、濃い化粧をしている。手には客のものと思われる靴下の片方を持ち、それを繕っている。この二人は不意の客が王であることに気づき、その部屋は誰も来ない場所であると安心させ、酒をすすめてもてなす。先客が詩人であることを告げられ、落ちついた王は、詩人の不平や夢に耳をかし、自分も常に考えてはいたのだが周囲のものたちとは語り合えなかったいろいろの事柄を詩人に尋ねる。美しい娼婦リサは二人の男性の会話にこそ加わらないが、傍にいてなごやかた雰囲気をもかもし出す。三人のいるこの部屋には心地よい平和と幸福がみなぎる。すでに用事をすませていた詩人は、王をリサの元において部屋を立ち去る。途中王を探している従者たちに出会うが、上手に

彼らを追い払ってしまう。

2. この作品を読んで先ずブリクセン特有の雰囲気を感じるのであるが、それには、この作者特有の時代設定——決して現代にしないこと——それに、詩人、娼婦、王、といったかなり珍しい登場人物の組合せ、その上、三人の坐している場所が娼婦の密室であるといった着想の奇抜なことがあずかっている。上記の三つの要素が一種独特の世界を構成していることに読者は新鮮味を見いだすことができる。そこでもう少し詳しくこれらの点について考えてみる。

2.1. 物語の時代は1767年とあるからには、デンマークの専制君主クリスチャン7世（Christian VII, 1749～66—1808）が既位した次の年である。あの劇作家ホルベア⁽⁷⁾が没してから13年の月日が流れ去っている。18世紀の中ばといえばブリクセンの好んだ時代と思われ、彼女は時の王とその王后、英国から若くしてやってきたカロリネ・マチルダの時代についてはかなり詳しく、作品“詩人”（‘Digteren’: Syv fantastiske fortællinger, 1935）の中に述べている。全劇場を閉鎖したクリスチャン6世の暗い時代は去って、再び劇は華かにとり上げられ、王自身もフランスの俳優たちを優遇した時代であり、この物語に関係のあるヴォルテールの劇⁽⁸⁾などもコペンハーゲンの劇場で上演されていた。しかし一方、王后と恋に落ち入った宮廷の主治医、シュトルーエンゼーの進歩的で革命的な政治が始まろうとするいわば準備の時代でもあった。（一日の中でも11月のある夜という時間帯が選ばれていることも二人の男性の対話の内容に影響を及ぼすと考えられる。）

2.2.1. 詩人、リサ、王の三人はいずれも歴史上実在した人物である。詩人は後に国民詩人とうたわれたヨハンネス・エーヴァル（Johannes Ewald 1743—1781）その人であり、1767年当時は未だ名をなすに到っていない24才の青年である。このエーヴァルはブリクセンの住いとなったルングステットに一時期住っていたといわれ、特に彼女と関係の深い詩人である⁽⁹⁾。この物語の中では、実名では登場せず、ヨーリック（Yorik）として紹介される。これはスターン（Laurence Sterne, 1713—1768）の“感傷の旅”（Sentimental Journey, 1768）の主人公の名であり、また同時にシェークスピアのハムレット中に出てくる道化師の名でもある。ブリクセンのシェークスピア好みはよく知られており、深い知識を幼い時から持っていたと思われるところから、作者の念頭にはこの物語の中でヨーリックが道化師役を王の傍で果すという役割を“感傷の旅”の主人公の役目に重ねている意図が読み取れるのである。

2.2.2. リサは町に住む娼婦で、エーヴァルはずっとこの女性のもとへ通っていた。美しく、気だての良い善良な女性として登場するが、詩人と王の会話には一言も口をはさまず終始沈黙を守っている。

2.2.3. 王は前述のクリスチャン7世で、うら若い18才の青年であるが、物語の中では詩人にオロスマネ（Orosmane）と回教君主の名で呼ばれている。前述のように当時ヴォルテールの作品“ザイール”（Zaïre, 1732）はコペンハーゲンの劇場で上演されていた（1757～84）⁽¹¹⁾が、この物語の1767年の2月には王自身が主人公のオロスマネ役を宮廷の假劇場で演ずるほど王も芝居好きであった。ヴォルテールの劇では、この回教君主はキリスト教徒の女性に恋し、遂には自殺をとげなければならない運命に見舞われるのである。実際、クリスチャン7世も、キリスト教道德の圧迫によって気が狂ったとされ、ブリクセンがこのデンマーク王の運命と回教君主オロスマネの運命とを微妙に重ね合わせ、物語の中で王にこの名を与えているところにもイメージの重層があって面白い。王は街におかかえの娼婦をもったり、また一時その女を宮廷にかこつたりしたこともあったらしく、それゆえ周りの宮臣たちの反感をかっていたという。（Danmarks Historie 9, p. 424）

上記のように特異な三人の人物の組合せがなされており、ここにもすでにブリクセン流の手法が始まっていることが見てとれるのである。

2.3. 次に場所に関してであるが、この物語の題が示すように夜のコペンハーゲンであり、街の裏通りにある一つの密室である。娼婦リサが客を迎い入れた部屋は快く暖められ、ストーヴの上にはリングがジュージュと音を立てて焼けている。部屋には一時的に王座となる肘掛椅子が一つ置かれていて、そばには天蓋のついたベッドがある。誰も他の者が入って来る心配も、また誰に気兼ねをする必要もなく、詩人と王が心の奥に秘められた秘密を語り合うのにこの上なく適当なところである。

2.4. 外面上は1767年の11月のある夜の数時間という限られた時間と、小さな娼婦の部屋という四角い制限されたスペースをもうけながら、登場人物の想像と思考の世界が大きく拡がり、永遠の時間と宇宙全体をも包む空間になっているのである。このような構成上の特色は、リアリズムの作家たちが好んで用いた、時代や人物像とは全く異なるものであり、構成においてもこのようにブリクセンの作品には、いわゆる伝統を破った新鮮味が感じられるのである。その新鮮味は芸術的で、審美的、ロマンチックなものであり、また、一種奇怪な感じを与えるもので雰囲気は非常におおらかで、当時の文学に対してはいわゆる反伝統的であると云える。以上のようにすでに構成上にみられる特色をふまえ、次に内容の分析に移るのであるが、その前にちょっと、内容の進行方法について述べなければならない。

3. “夜のコペンハーゲンでの対話”は全部とはいえないが、その大部分が対話の形で進められる。リサのところで少しふれたように、対話は二人の男性、すなわち詩人と王の間でなされ、女性は一言も語らない。彼らの話はテーマが非常に豊富で、それが自由にとび移るのである。ブリ

クセンはその多くを詩人の口から語らせ、前半は特に詩人の分が多く、後半には王も雄弁になってくる。二人は酒を飲みながら、焼リンゴをつまみ、リサの側で打ちとけた雰囲気の中で楽しく、軽やかな調子で、自由で大らかな会話を楽しむ。その極めて変化に富んだ話の内容には多くの面白い点を含んでいるので、その中で中心となる要素を詳細に見てゆくことにする。

3.1. 登場人物はそれぞれ物語の中心要素を代表していると思われるので先ず、詩人のもつ不平、あるいは悲しみからみてゆくことにする。

3.1.1. その一つ目は日常生活において貧乏なことである。靴の底に穴があいて、ずい分水がしみてくるのだが、このような貧乏には慣れてしまっているという。しかし、リサには気の毒なことにすぐ払いができない。悲しみの二つ目は自分が全能でないということである。(テキストp.182) “君主様、私は生きとうございます。……その日暮しよりも永く、人間の一生といわれるようなつかの間の年月より長く。世代を越えて、時代を越えて生きとうございます。……” (p.184) と詩人は言い、全能になって生き続けたいとの希望を持っている。ここにおいてわれわれが見る詩人は、日常的には非常に貧しく、苦しい生活なのであるが、そう云った現実を越えて永遠に生きたいと願っている姿である。すなわちその現世の不幸の代償である芸術の中に永く生きることを欲するのである。

3.1.2. 詩人の言葉を通じてはっきりとブリクセンの芸術論が展開される。“万物の創造主である神はロゴス (Logos 一言葉) をもって、この世界をつくり、詩人をもつくった。詩人はそれに報いるために、神のロゴスを人間のミトス (Mythos 一話 cf. 6.4) に変えて、神と一緒にいる時には持ち帰らなければならない。……詩人の使命は実に、この地上に永遠に残るべき物語を神のロゴスから創り出すことにある。……またミトスとは天上に於ける詩人の生活が地上に映ったものである。” (p. 187) “私が天上で神と一つになる時は、神はほほえみながら、しかし、私は目に涙して地上を見下し、私のミトスが私が亡くなった後も地上に残るようにと期待している。” (p. 187) ブリクセンは詩人の使命をこのようにユーモアを持って語るのであるが、まじめな事ながら、余裕をもって、ユーモアをまじえて語るところが彼女らしさの一つである。また、彼女はこの詩人の自負は恐ろしいことであるとしながらも、“でもまた勇気のわく、すばらしいことでもございます。ただ、この事だけを守っておりますと、不幸も苦しみもございません。” (pp.187~8) と言っており、作家たるものにとって、すべての不幸も苦しみも、神からの恵であると理解して、すべての逆境に耐えぬいたブリクセンの生き方は、この芸術論からきていると思われる。

3.1.3. ブリクセンは神々に作家は一つの返事を負っていると云い、現実生活にあっても、彼女は、親しい友人に、何らかの運動のためとか、文化運動のために書くようなことはなく、“神々に一つの返答を負っているから”⁽¹²⁾ 書くようにと諫めたという。作家としての使命については“カー

ネーションをつけた若い男”においても論じらるている。⁽¹³⁾

3.1.4. ブリクセンは、詩人の使命について述べた折、“天の神と自分が一つになる……” (p. 187) と言う表現をしており、“神々のために書くのだ”と上記の友人の詩人にさとした時にも複数型 (Guderne) を用いているところをみる時、ブリクセンの意味する神がキリスト教の神とは異なるものであることに気がつく。なぜなら従来のキリスト教的考えからすれば、神は一つの神であり、常に人間の外に、また、高いところに存在するものであって、神と一つになるという考えはない。したがって、ブリクセン流の考えからすれば、神は人間の中にある神性とでも理解することができるのである。ブリクセンの神は必ずしもキリスト教会のいう神とはびったり一致しないと思われ、ここにも彼女のいわゆる“異端的”で、反キリスト教的な考えが表されているのである。彼女の弟トーマス (Thomas Dinesen) はその姉について書をあらわしているが、彼もそこで、“姉のいう神は運命という言葉とほとんど同義のようだ”⁽¹⁴⁾と云うことを述べている。いずれにしろ、彼女の神はキリスト教の云う神のみに限定されない、もっと拡がり、融通性をそなえた神、あるいは人間の中にみる神性とも云えるものをさすのではないだろうか。

3.2.1. 詩人の紹介するところによれば、物語の中のただ一人の女性リサは、“詩人に掛で身を買ってくれる”ような善良な女である。(p. 179) それに答えて、王もまた、“アラバスターのつばに百ダーラーを入れて明日にも詩人の借金をリサに返してやる”と云い、また、“われわれの都で娼婦が泣くようなことがあってはならぬ、彼女たちは教養ある婦人として高い官職につくべきである。……”(p. 180)と娼婦たちを賞賛するのである。いわゆる貞節といわれる女性たちは、王の考えによれば、リサの善良さを持ち合わせず、男性が力の限り、すべての生命と永遠を彼女たちに注ぎ込む時にすら話をしたがるものだという。そしてまた、“貞節な女たち”は、男性が沈黙と沈黙からくる救済をあこがれていることについても無智であるとなじっている。(p. 180)

ここにおいて女性は何云わぬ大地の象徴として登場していることがうかがわれる。そして、二人の男性がこのリサを賞賛するのは、リサは気立てが良く、二人の話せる部屋を提供してくれ、だまって話に耳を借し、彼女の優美さでもって、二人の話を美しくしてくれたからなのである。(p. 194) このようなリサの見方は、道徳の範疇の中にあるのではなく、この点からもブリクセンの当時の伝統——すべてを道徳的にみようと——を破っているといえるのである。

3.2.2. むしろ、女性リサは詩人の芸術を助けるものとして登場しているのであって、次の詩人の言葉によってそれがうかがえる。詩人が永遠に生きるためには、“われわれを受け入れ、宿を借してくれ、この地上で永遠の生命を経続させてくれる恋人が必要でございます。……”(p. 184) “彼女のようなものがあるということは、われわれの魂にとっても、肉体にとっても慰めであり、

私のようなものにとっても、有難く祝福されたことをございます。” (pp. 179—80) 詩人のミトスに永遠の生命力を与えるのは大地であり、この大地は肉体とも女性とも理解できるから、ブリクセンの芸術の中に、神—ロゴスと詩人—ミトスに次いで、リサ—大地がその重要な要素として加えられなければならないのである。このリサの果す大地、あるいは肉体は、もともとキリスト教にあっては、否定されてきた要素であり、キリスト教が精神から肉体を切り離し、精神の純化をその特徴としていることを考え合わせ時、ブリクセンがその芸術を永遠ならしめるために缺くべからざる要素として、大地—肉体を加えていることも極めて異教的であると云わなければならない。

3.2.3. ブリクセンは上記のように、芸術のためには大地は缺くべからざる要素であるとし、女性、感能、エロス、生命力、肉体をも含めてこれを重要視したが、ここでは一般的な彼女の女性観に少しふれてみることにする。彼女の随筆集の中に、女性についての講演が一つ含まれている。⁽¹⁵⁾ その講演の中で彼女は明白に、女性の価値は男性の場合のように、どれだけ自分の外で、どのような仕事をやったかで決まるのではなく、その女性がどんな女性かということできまるといっている。すなわち、その女性自身が美しいか、巾広いひととなりの持主であるのか、親切かどうか、才能があるかないかなどで判断するのだと云うのである。今ここでブリクセンの女性論を云々するのは、この小論の目的ではないが、彼女が“夜のコペンハーゲンでの対話”の中で描き出したリサという娼婦を考えてみる時、3.2.1で述べたように物云わぬ大地の象徴としてのリサには一言も語らせなかったという点が興味深い。

ウーマン・リーヴを叫ぶ女性が増加していた当時のデンマークで、彼女は“私は女性問題を云々する女性ではないので……”とある講演をことうったことがあるが、⁽¹⁶⁾ この上記のような女性観は、あくまでも原点に立ち戻ったブリクセンの女性観なのであろうと考えられる。

3.3.1. 詩人とは対照的に、この地上の権威者として現れるのが王である。3.1.2で述べたように詩人は自分がリサに借りがあると告げた時、すぐ明日にでもそのつぐないを詩人に代ってしてやろう (p. 180) と云っていることから明らかである。王は地上における全能者であり、ただ神の意によって王となったと云う点では詩人と共通である。(p. 175)

3.3.2. しかし、上のような意味での全能者である王にも悲しみはあるので、彼は詩人に、宮廷にはミトスがないこと、また人々は王と詩人の結合が全能であるためにそれを恐れ、この二人を引きさこうとしているといった悩みを訴えた後、次のような5つの質問をし、詩人の意見を尋ねる (pp. 191—2):

- (1) 他のものがわたしに見せてくれるものより、世の中ははるかに美しいものだろうに。
- (2) 人間は、より善良に、より偉大に、より美しく創られているだろう。

(3) 享樂とは、人々がわたしに経験させてくれるものより、ずっと面白いものではないのだろうか。

(4) 俳優たちは、わたしの前で演じているほど、みじめではないであろう。

(5) わたしが実際に知ることができる以上に女性と寝床を共にすることは、はるかに快いものではないだろうか。

これに対して詩人はすべてを肯定する。二人は現実を全面的に肯定する態度を取っており、王の興味の対象は詩人のそれと全く異り、あくまで現世のことであり、ここに王の占める領域を見ることができる。

3.3.3. これら5つの質問は、感能の世界をも含めた美の世界であり、真実の世界であり、現実を生き抜く知恵とでも云うべきものである。この世において十分に、そして、完全に生きることを肯定する立場を取るものとして王がおかれている。

3.3.4. また、この王の質問を詩人もリサも共に肯定し、その現実を生き抜く知恵をもつならばそこには完全な幸福があると王はいう。(pp. 192~3) しかして、この世における、人間生活の中にみられる完全な幸福は以下の三種類にまとめられ、それらを詩人は次のように表現している：

(1) あふれるような力を感じること、(2) 神の意を人間は行っているのだと確信をもって知ること、(3) 苦痛の停止である。

3.3.5. 王はこの物語の最後で、リサを通じて詩人と結合するのであるが、それを詩人は次のように云っている：“その昔北欧で、乳兄弟が物言わぬ慈悲深い大地のひざで男らしく永遠の契を結ぶべく血を混ぜ合せたように、民のひざで王と詩人はその存在の最も深いところのものを結合させることができる。”(p. 195) ここにおいて繰返して大地の重要さが強調され、さらに、生命の根元としての女性—リサの役割が力説されているのである。

4. ブリクセンは“夜のコペンハーゲンでの対話”の中に18世紀に生きた実在の人物、詩人のエーヴァル、娼婦リサ、デンマーク王クリスチャン7世を登場させ、文学上の人物とイメージを重ね合わせて、それらの人物の特徴を暗示している。すなわち、詩人には芸術の、また王には現実の世界を象徴させつつ、その両者に生命を与え、かつ両者を統合する、もの云わぬ大地の象徴として女性リサを描いている。このようにブリクセンの作品は物語の時代や人物設定において、当時の自然主義リアリズムの文学傾向に対して非伝統的であり、詩人、女性、王の三者を一体とした独特の宇宙を創造し、その中で女性は、神のロゴスをミトスに変えるという使命をおびた詩人に生命を与え、また地上において、全能なる王と、詩人を結び統一する役目を負うものとして重要視される。これはまた、反キリスト教的であり、キリスト教以前の人間の自然な姿に根ざした根

元的なものと云わなければならない。また、ブリクセンは、前述のように神の理解においても反キリスト教的、異教的な態度をはっきりと示した。会話の内容はあくまでも普遍的なものであり、日常性から速に哲学的、本質的なものへと移行している。したがって、ブリクセンの描く世界は詩的でロマンチックであり、大きな地理的、また時間的な広がりを感じさせるもので、多分に回教文化の影響とも受け取られるエキゾチシズムもまじえて、一種奇怪で美しいものとなっている。

5. ブリクセンが、“夜のコペンハーゲンでの対話”を書き上げたのは1950年とされているから、それは丁度彼女の65才の時である。彼女はこの年になって、現実生活に充分生きられなかった自分の人生をふり返ることもしばしばであったろう。アフリカ滞在中（1914～31）に病気になる、実生活では、その肉体を失ってしまったかのような生活であった。そこで彼女が、現実には生きられなかった自分を文学の中で語り、自分の人生を完全につくってゆかざるを得なかった。彼女は若い時、悪魔とかけをし、これから自分が経験することはすべて物語になると云い、芸術において自分を完全に生かそうと強く決心したのである。⁽¹⁸⁾このように、芸術に自分の人生を賭けたブリクセンのすぎまじい生きざまが、迫力をもってこの作品を読む者に迫ってくる。

ブリクセンは自分の経験を当時の多くの作家たちのように、個人の告白といった型では書かなかった。あくまでも文学的な伝統にのっとり、それを高い芸術作品にまで完成したのである。

“ヘレチカ”の最終巻（2，3号 1953）に、すでにブリクセン論を執筆しているブランド⁽¹⁹⁾は、現在もなお詩人としての文学活動をつづけているが、彼がある所で、デンマークの50年代は現代と同じように、非常につまらない気むづかしい時代で、すべてを道徳の範疇で価値づけようとした、ヴィクトリア朝後期とも称されべき、歴史上最高に道徳的な時代だ、という意味のことを述べているが、当時の文学テーマも日常性の強い社会的、政治的なものが多かった。その中でブランドの友人であったブリクセンは、社会的、政治的に解決できない問題に興味をもち、永遠、神、人間の運命、詩人の使命といったものをテーマにした。この“夜のコペンハーゲンでの対話”には、現実では永遠になれないとわかった一人の女性が、芸術をその代償として永遠を問題にしようとする姿が打ち出されている。物語の中の詩人は、地上への興味からは決して離れることなく、死して天上で神と一つになる時、“ミトス”を持ち帰り、神と共に地上を見下し、自分なき後も自分の書いた“ミトス”が地上に続いて存在しているかどうかを眺めるという風に述べている。そこには、死んで行かなくてはならない自分、いやすでに死んだ後の自分になり切ったブリクセンの姿が見られ、何か読者の胸を打つものがある。

物語の中のたった一人の女性にしても、娼婦をあてるという作者ブリクセンの奇抜な発想も決して偶然ではなく、彼女の実生活に照らしてみる時、彼女がその実生活で生きられなかった部分を代表するのに典型的な女性——いわば彼女の「影」となるような女性を選んだのではないかと思われるのである。

いずれにしろ、65才という年令にあったブリクセンが、これから先、この世に生きる時間の短

かいことを痛感し、それゆえに永遠に生きたいという激しい願望を、この文学作品“夜のコペンハーゲンでの対話”の中で強く押し出していることもうなづけ、また感動させられるのである。

6. 最後に少しふれておきたいことは、物語の描写についてである。ブリクセンは好んで美しい比喩を用いて事物の様相を伝えるが、ここにもいくつかの指摘すべき個所がある。またデンマーク語の中にまき散らされた多くの外国語—特に仏語—の語彙や文章は実に効果的で物語の内容に一段と変化を与えるものである。

6.1. 雨が降って、暗闇の中に横たわっているコペンハーゲンの街に立つ街燈や窓から出る光を“海底で燐色の輝きを放つ水母くらげのよう”だと表現し(テキストp. 167)、さらに、詩人と王が心の中を語り合える貴重な時間を、“まわりで潮が流れる暗いコペンハーゲンの底にある牡蠣の真珠のようである”(p. 176)とも云って、11月の夜のコペンハーゲンを海の底にたとえているが、また、ブリクセンの想像は空へも自由奔放に飛翔を試みる。例えば、三人が完全な幸福の中で、あふれるばかりの力を感じているのを、“ちょうど今三人一緒にいながらにして自由に空中に上れる——あたかも、たった一本の紐でこの濡れたコペンハーゲンに連ながれている風のように!”(p. 193)と云っているところにも見られる。

6.2. 仏語はその多くを王の口から聞けるのであるが、これは18世紀半ばのデンマーク宮廷でフランスの俳優たちを迎え、特に王などは自然に仏語を話す機会が多かったということもあろう。L'on vient!(p. 173), O lâ lâ(p. 173), Tu l'a dit!(p. 190)……il y a dans ce monde un bonheur parfait. (p. 193)などは一例にすぎず、また、王は詩の朗読を仏語でしている(p. 178, p. 191)。詩人の会話にも単語としての仏語が数多く目立つが、文章も含まれている。例えば、Non, jusqu' ici nul mortel ne s'avance!(p. 173) O mon Soudane!(p. 173)……la Grâce de Dieu……(p. 175) Bénissons le Seigneur, Lise,……(p. 180)……udføre la volonté de Dieu.(p. 194)などである。

6.3. それにひきかえ独語の方は少く、王が、品のよくない話をしている間に女が“Um Gottes Willen —was bedeutet dies!”(p. 181)と叫ぶだろうと引用している。また、独語がデンマーク語の中に混合された文もみられるが、これは王を探しに来た従者の言葉である。“Og der er kein anderer daoben?” “Kein anderer!”(p. 196)このようにブリクセンは当時の社会で各々異ったグループの人々がより好んで用いたであろう外国語をそのまま巧妙に物語の中に再見している。

6.4. ラテン語、ギリシャ語の使用はごく数語にすぎない。……Dignum et justum est [at en jor-disk Kongens Haand besegler den.”](p. 188)。ギリシャ語の mythos はこの物語の中で特に重要な語となっているが、ブリクセン自身この語の意味を説明して、“……Og Mythos betyder : det

græske Sprog Tale. Eller —……”(p. 186) (ミトスはギリシャ語では話の意味ですが、私はギリシャ語に強くないので学識のある方は、まちがっていると云われるかも知れませんが)と詩人に云わせている。

6.5. 上記のように適所に駆使されている外国語は、ブリクセンの作り出すエキゾチックな世界の中では、すっかり無視できない要素である。比喩については、また別にそれだけを取り上げ考察するに足る価値をもっている。

このような比喩が外国語を含む文体上の特色も、奇抜な構成や、その豊富な内容と相まって、物語を一層味わい深いものとしているのである。

以上“夜のコペンハーゲンでの対話”の考察を一応終え、次にこの短編をその最終号に掲載した文芸雑誌“ヘレチカ”について述べてみる。ブリクセンの作品に見てきた特徴ある性格はまさに“ヘレチカ”がその出発において望んでいたものであった。それゆえ、ヘレチカの発展過程と実情に照らし合わせてブリクセンの作品を読む時、一層その価値を明確にすることができると思われるからである。

III

1. 今世紀に入って30年を経ても、デンマーク文学の主流はなお、前世紀末からの伝統を受け継いだもので、幻想や理想を退け、文体においても練ったものや、込み入ったものを避けようとする、いわゆる自然主義、現実主義的な色彩が濃いものであった。しかし、新しい傾向の文学作品が全然なかったわけではなく、30年代の中頃になって、ブリクセンの処女作“七つの奇怪な物語”(Syv fantastiske forællinger,⁽²¹⁾ 1935)が何の予告もなしに現れ、幻想的で異国情緒と異教的な特色を多分に含んだその作風は多くのデンマークの読者や若い詩人たちを魅惑した。(もっとも、この作品集は1934年、Seven Gothic Tales として、英語版でニューヨークやロンドンで発表され、全く独創的でユニークな作品集として大きな反響を外国で呼んでいたものである。)続いて発表された“アフリカの農園”(Den afrikanske farm, 1937)や、戦時中に出された“冬の物語”(Vinter-Eventyr, 1942)もやはり、国の内外でその一種独特な作風が喜んで受け入れられ、一つのエポックをつくったのである。

その後大戦が終了して数年たち、ブリクセンを迎えて、異端者、或いは異教徒という意味をもつ、“ヘレチカ”(Heretica, 1948~53)と称する文学雑誌が誕生した。当時の文学界は、従来の文芸主張に対して反省し、すべてを根本的に考え直そうとする風潮が高まっていたのであるが、前述のブリクセンの作品などが、こういった文学界に強い刺戟を与えていたことはたしかで、“ヘレチカ”は新しい文芸の方向を模索していた多くの作家たちに、その活躍の場を提供する目

的で生れたものである。そして、この“ヘレチカ”には100人に余る内外の詩人、小説家、評論家などの作品が6年間にわたり、470点が発表された。

最初、誰が提唱して“ヘレチカ”発行の運びとなったかは、第I章で述べたが、この二人は更に、ヴィルヘルム・グロヨンベック (Vilhelm Grønbech, 1873—1948)、マーティン・A・ハンセン (Martin A. Hansen, 1909—55)、パウル・ラクーア (Paul la Cour, 1902—56)、エーリック・クヌーセン (Erik Knudsen, 1922—) などにも呼びかけて、ヘレチカ・グループのメンバーとした。“ヘレチカ”提案者の二人は次々とブリクセンに若い新しいメンバーを紹介したので、彼女の住いであった、ルングステッドルン (Rungstedlund) には詩人や小説家などだけではなく、20才に満たない学生やジャーナリストなども集るようになり、これらの精力的で野心にもえた有能な若者たちは、ブリクセンの作風や彼女の人となりに強くひかれ、時としては原稿を持ち寄って、文芸について語り合ったりもした。

さて、1948年の1月に“ヘレチカ”は発行されたが、これの出版はオーラ・ウィーヴェルのウィーヴェル出版社 (Wivels Forlag) が引き受けることになった。“この雑誌が特定の作家たちだけに片寄ることなく、常に各方面の代表者から生氣と新鮮味を受け入れるために、編集者は2年毎に交代することになり、最初の2年はビョーンヴィー (1918—) とビョーン・ポウルセン (Bjørn Poulsen, 1918—) が、そして、次の2年間にはウィーヴェル (1921—) とマーチン・A・ハンセンが、また、最後の2年間にはフランク・イエーア (Frank Jæger, 1926—77) とタァエ・スコウハンセン (Tage Skou-Hansen, 1925—) が担当した。しかし、以上のように理想にもえて出発はしたが、当初から多数の作品が投稿され、その内容も多様で、編集者間で意見が分れることが多く、なかなか困難な仕事になった。1949年の10月頃にはブリクセンは編集者の一人であったビョーンヴィーに手紙を出して、“ヘレチカ”について不平をもらしていたという。彼女は最初非常な興味を示しただけに、希望と期待をかけすぎていたのであろう。それなりに、失望のほども人一倍であったと思われる。不平に満ちた声で“ヘレチカ”を批判し、彼女独特の直感でもって、それまでの経過をみて、この雑誌の将来を否定していたという。彼女からみれば、最初から自分を仲間に入れたからには、自分のもっている“異教的宇宙観”⁽²²⁾を雑誌全体に入れるべきであり、古典的な文学の伝統の上に、更に、榮譽と運命の觀念⁽²³⁾を統合すべきであるにもかかわらず、“ヘレチカ”にはこのような要素が少なすぎるというわけである。それに加えて、この雑誌にはプロテスタント的隣人愛のような哲学をもっており、暗に芸術の危機を述べていることも不満の理由であった。⁽²⁴⁾

このようなブリクセンの批判はともかく、“ヘレチカ”は年間5冊(原則的には1, 3, 5, 9, 11月)発行し、合計30冊を世に出したのであった。3年目にあたる1950年の編集後記によれば、当時この雑誌の部数は2000部をこえており、デンマークにおける文学雑誌としては非常に多い部数であった。これ程多くの部数をもつ“異端者”——“ヘレチカ”——が果して少数の人たちのための異端的な雑誌であるといえるかどうか、と自問しつつ、実際にはこの雑誌が文壇ですでに

確固とした位置を確保していたことを暗に自負している様子がうかがえるのである。だが、また一面、この年にはやくも雑誌が内部で困難に直面していることを否定してはいない。問題は原稿が集らないといった種類のものではなく、前述のように、雑誌内部の人々の意見調整が最大の難事であったようであり、一部の者たちの期待が裏切られたこともあって、“ヘレチカ”には危機が迫っていたことがうかがえる。この年には当時の思想界の代弁者であり、創刊号から活躍していた前述のグロヨンベックはすでに世を去っており、同じように創刊号を新しい詩論“ある日記の断片”(Fragmenter af en dagbog)で飾ったラクアーは2年目からは投稿していない。また、最初の2年間編集にあたりつつ、多くの意欲的な作品を発表していたビョーンヴィーもポウルセンも寄稿していない。そればかりではなく、若手の詩人、エーリック・クヌーセンは、自分の道を歩みはじめ、“ヘレチカ”に対抗するため、マルキシズムを基盤とする方向へと転換し、雑誌“対話”(Dialog, 1950~62)を出版するようになった。当時の編集者はこのような“ヘレチカ”の有様を次のように云っている：“どちらかといえば、ただ観念的で現実のものでなかったヘレチカ・グループは、現在、今までよりも一層、単なる“サガ”的な存在になっている。”⁽²⁵⁾ (Heretica III 1950, p. 517)

このような事情であったにもかかわらず、“ヘレチカ”が廃刊になった1953年には、その発行部数は更に増加して、3000部を数えているのをみても、この雑誌が想像にあまる生命力を持ち続けていたことがわかるのである。しかし、内的な問題が解決されない上、この年にはヴィーヴェル出版社が、より大きいギルドンダール社(Gyldendal)と併合されるという外的な条件が加わったこともあって、“ヘレチカ”の編集者は、“その生命力をいまだ“ヘレチカ”が証明している間に、廃刊することが妥当であろう”(Heretica VI 1953, p. 564)という結論に達する。そうして11月号をもって“ヘレチカ”は6年間の活動を停止する。その後、オーラ・ヴィーヴェルが移っていったギルドンダール社から、新しい文芸雑誌“ヴィンローセン”(Vindrosen, 1954~73)が発行されることになり、最後の年の編集者の一人、スコウ・ハンセンがこの新しい雑誌の編集者として加り、ブリクセンも投稿している。だが“ヴィンローセン”は、その前身であった“ヘレチカ”と全く同種類のものではなく、“ヘレチカ”に反対する意見の作家たちをも含めた、より広い範囲から作品を募集するという方針で始められたのである。(Heretica VI 1953, p. 565)

2. 以上のように“ヘレチカ”は戦後数年して発行され、比較的短い期間しかその生命を保ち得なかったにもかかわらず、現代活躍する作家たちの中には、“ヘレチカ”でデビューした者も多い。⁽²⁶⁾例えば、つい先月51才で世を去ったフランク・イエーアなども“ヘレチカ”でその最初の詩を発表し、(I 2, pp. 141~146)また、この雑誌の最後の二年間は編集者として働いた人である。彼は時代の“アラジン”といわれ、今日のデンマーク文学界を代表する詩人・作家の一人であるが、ある意味で彼の初期の時代—ヘレチカ時代—の特色を一生持ち続けることのできた作家であるといわれている。“フランク・イエーアに別れを告げることは、自己の青春に別れを告げ

るようなものである。彼は同時にその時代に生き、時代に反抗し、時代の外に存在した詩人である……。”とその才能を称賛されているのをみても、⁸⁷⁾ “ヘレチカ”が当時、大戦後のデンマーク文学界にあって、旺盛な新しい生命を育てたのみならず、今日に到るまで少なからぬ影響を与えつづけているといえるのである。

(1977年 8 月)

付録

HERETICA

巻	年 度	作 家 数 (延)	作 品 数	頁 数	編 集 者
I	1948	22	56	422	Thorkild Bjørnvig
II	49	38	71	490	Bjørn Poulsen
III	50	32	76	522	Martin A. Hansen
IV	51	35	86	580	Ole Wivel
V	52	33	81	520	Frank Jæger
VI	53	31	100	580	Tage Skou-Hansen
合 計		181	470	3114	各 2 名 づ つ 2 年 間 担 当 計 6 名

○発行所 Ole Wivels Forlag, København (Copenhagen)

○発行回数年間 5 回

○発行部数ca. 2000 (1950) 3000 (1953)

○定価 年15kr (一部3.5kr) 18kr (4 kr) 1952年以後

次に紙面の都合上Heretica 30冊のうち、第1巻の1号と第6巻の5号の目次をあげておく。

() 内は筆者の訳

(I — 1) 1948

作家名 (訳者)	作品名 (和訳 ⁽²⁸⁾)	備考
W. H. Auden (Th. Bjørnvig)	Befrielsen (解放者)	> 英国詩人 <
Paul la Cour	Fragmenter af en dagbog (ある日記の断片)	詩論
Ole Sarvig	Vintersolhverv (冬至)	詩
	Gud i Forstaden (郊外の神)	//
Martin A. Hansen	Romanens forfald (小説の衰微)	スウェーデンで 行われた講演
Thorkild Bjørnvig	Fristelsen 1 — 3 (誘惑)	詩
Ole Wivel	Stefan George (G. ステファン論)	ドイツ詩人評
Aasmund Brynildsen	Aforismer (格言)	> ノルウェー詩人 <

(VI-5) 1953

作家名 (訳者)	作品名 (和訳)	備考
Thorkild Bjørnvig	Barndommens hus (少年時代の家)	詩
Karen Blixen	Samtale om natten i København (夜のコペンハーゲンでの対話)	短編
Niels Barfoed	Til Keats (キーツにささぐ)	詩
	Opbrud (かどで)	〃
	Dit ansigt (君の顔)	〃
Tage Skou-Hansen	Sheriffen, Klovnen og fiskeren (保安官と道化役者と漁夫)	エッセイ
Ole Wivel	Jysk sonet (ユトランドのソネット)	詩
	Tidligt foraar (早春)	〃
	Sten (石)	〃
	Efteraar (秋)	〃
	Vinternat (冬の夜)	〃
Martin A. Hansen	Haavn (ハウン氏)	短編
Frank Jæger	Afsked med sommeren (夏との別離)	詩
	Hjemvé i Jylland (ユトランドへの望郷)	〃
	Dampskibet "Prøven" (汽船 "試練")	〃
	Lange Vinter (長い冬)	〃
	Kommentar (コメント)	編集者後記

注

- (1) Thorkild Bjørnvig: *Pagten*, Thomas Dinesen: *Tanne*
Clara Svendsen: *Notater om Karen Blixen*
- (2) "Det er en stor, ejendommelig fortælling, fascinerende, henrykkende, gådefuld."
Politiken: (4. 15. 1975)
- (3) *Pagten*, p. 7
- (4) 第III章で詳しく述べる。
- (5) ある作家のペンネームにからむ事件で、K.Bは侮辱されたと怒り、それまでに"ヘレチカ"のために渡してあった"Samtale"の原稿を取り戻すとまで言った。(*Pagten*, p. 61)
- (6) "学報"第33号掲載: カーレン・ブリクセン「カーネーションをつけた若い男」にみる文学観—につづくものである。

- (7) Ludvig Holberg (1684～1754)
- (8) Voltaire (1694～1778) のZaïre (1732)
- (9) 1773～76 Ewald は現在のブリクセンの家に住んでいた。
- (11) 15才位からシェークスピアに親しんでいたという。
- (11) cf. Dansk Litteratur Historie (p. 488)
- (12) Thorkild Bjørnvig をさす。cf. *Pagten* (p. 25)
- (13) cf. 拙稿(6)
- (14) cf. *Tanne, min søster Karen Blixen* (p. 57)
- (15) *Essays*, 1965
- (16) “En baaltale med 14 aars forsinkelse” *Essays* (pp. 71～94)
- (17) cf. *Essays* (p. 73)
- (18) cf. *Pagten*. (p. 50)
- (19) Jørgen Gustava Brandt (1928～) “Et essay om Karen Blixen I – II”
- (20) cf. Berlingske Tidende (2 . 27. 1976)
- (21) cf. 拙稿 “カーレン・ブリクセン” 一人とその作品一についての小論
(学報第29. pp. 221–230)
- (22) cf. *Pagten*, (p. 35)
- (23) cf. *ibid*
- (24) cf. *ibid*
- (25) “Heretica-Kredsen, som nærmest kun har været et begreb og ingen realitet, er derfor nu i højere grad end nogensinde en saga blott.” (p. 517, Heretica 1950) この場合saga とは実質をとみなわぬ、単に名のみという意であろう。
- (26) Heretica どデビューしたJ. G. Brandt の著に40人の戦後の詩人を紹介したものがあがあるが、
(*Præsentation 40 Danske Digtere efter Krigen*)、その中でHeretica に当時執筆したものは21名である。
- (27) “Frank, Jæger—en digter i tiden, imod tiden og uden for tiden”
(Berlingske Tidende, 5 . 7 . 1977)
- (28) 筆者による。

テキスト

- (1) Blixen, Karen : *Sidste Fortællinger*, bind II, Gyldendals Tranebøger, Copenhagen, 1972.
- (2) " : *Essays*, Gyldendal, Copenhagen, 1965.
- (3) HERETICA I – VI, Wivels Forlag, Copenhagen, 1948–53.

参考文献

- (4) Andersen, Hans & Lassen, Frans : *BLIXENIANA* 1977.
- (5) Bech, Svend Cedergreen : *Danmarks Historie 9.*, Gyldendal, Copenhagen, 1965.
- (6) Bjarnhof, Karl & others ;
Det Danske Akademi 1960-67, G.E.C.Gads Forlag, Copenhagen, 1967.
- (7) Bjørnsen, Mette Koefoed & Hansen, Erik : *Facts about Denmark*, Politikens Forlag, Copenhagen, 1972.
- (8) Bjørnvig, Thorkild : *Pagten, Mit venskab med Karen Blixen*, Gyldendal, Copenhagen, 1974.
- (9) Brandt, Jørgen Gustava : *Præsentation, 40 Danske Digtere efter Krigen*, Gyldendals Uglebøger, Copenhagen, 1966.
- (10) Brostrøm, Torben & Kistrup, Jens :
Dansk Litteratur Historie 4., Politikens Forlag, Copenhagen, 1971.
- (11) Carlsen, Caroline : *Erindringer om Karen Blixen, Blixeniana*, 1976.
- (12) Hannah, Donald : *The Mask and the Reality*, Putnam & Co., London, 1971.
- (13) Höskuldsson, Sveinn Skorri : *Ideas and Ideologies in Scandinavian Literature since the first World War*, Univ. of Iceland, Institute of Library Research, Reykjavik, 1975.
- (14) Jung, G.C. : 人間心理と宗教 (浜川祥枝訳) ユング著作集 4 日本教文社
- (15) Langbaum, Robert : *The Gayety of Vision*, Chatto & Windus, London, 1964.
- (16) Lassen, Frans & Svendsen, Clara :
The Life and Destiny of Isak Dinesen, Random House, New York, 1970.
- (17) Migel, Parmenia : *Titania, the Biography of Isak Dinesen*, Random House, New York, 1967.
- (18) Skou-Hansen, Tage, & Peter P. Rohde :
‘Vindrosen’, 1 årgang, nr. 5 Gyldendal, Copenhagen, 1954.
- (19) Svendsen, Clara : *Notater om Karen Blixen*, Gyldendal, 1974.
- (20) Woel, Cai M. : *Dansk Literatur Historie 1900-50 Bind II*, Forlaget Arnkroner.

新聞記事

- (21) 1. oktober, 1974: ‘Det Strålende Vanvid,’ Politikens kronik, af Bent Mohn.
- (22) 27. februar, 1976: ‘Digteren Jørgen Gustava Brandt,’ Berlingske Tidende, af Birgit Rasmussen.
- (23) 11. maj, 1977: ‘Karen Blixen om ægteskabet,’ Politiken, af Bent Mohn.
- (24) 5. juli, 1977: ‘Frank Jæger—en digter i tiden, imod tiden og uden for tiden,’ Berlingske Tidende, af Jens Kistrup.
- (25) 21. aug. 1977: ‘Sarvig om Danmark de sidste 17 år,’ Søndags-Aktuelt, af Lars Hoffmann.